

短期大学生の散歩環境と転倒に関する研究

— 幼児教育科学生と看護科学生との比較において —

○清水敦彦 丸山政敏 山崎信也

(足利短期大学)

I 目的

本研究は、私学助成における特色ある教育研究「幼児と老年の転倒」（3年継続研究）についての研究途から生じたものである。それはある収容施設を訪問した際に「最近の若者の中には、顔から先に倒れ、前歯を折ったり、顔に怪我をする者がよくある。子どもや老人だけが転倒するのではないと思いますよ…」という話を所属長から聞いたからである。そこで、われわれは卒業後、幼稚園教諭や保育所保育士・施設保育士になる幼児教育科学生と病院の看護師（婦）になる看護科学生を対象に、日常生活における歩行状況や地域環境などを交えたアンケートを作成し、その実態を知り、検討を試みようとしたのである。

II 手続き

- 1 アンケートの作成：すでに実施している幼児や老年を対象にした転倒に関するアンケートを参考にして青年用を作成したのである。
- 2 調査期間：1999年7月～9月
- 3 対象と調査方法：対象は幼児教育科に在籍する学生223名と看護科に在籍する学生127名、計350名である。調査の方法は各学生に用紙を配布し、記入後に研究室に届けさせたのである。

III 結果と考察

結果の整理は上記の目的を達成するために単純統計の百分率で示した。

1 家族との同居状況

転倒における事故をみると、精神的な不安定さにも問題があると考えられることからの設問であるが、結果は表1の通りであった。全体に同居が多く、別居は

表1 家族と同居・別居との比率(%)

専攻学科	同居	別居
幼児教育科	96.0	4.0
看護科	84.3	15.7
全体	91.7	8.3

科別の比較をみると幼児教育科より看護科の学生の方が別居が多いが、

2 散歩対象となる場所

運動量が少なく、運動環境と歩行の実態を知るため

の設問である。結果は表2の通りであった。この表が示しているように、両科の学生ともに散歩の範囲は多く、中でも「たんぼ」は高い数値を示している。ただ

表2 散歩の対象となる場所(%) ※複数回答

散歩する場所	幼児教育	看護	全体
幹線道路	6.7	12.6	8.9
大きな公園	7.2	7.9	7.4
小さな公園	19.7	18.1	19.1
山	5.8	8.7	6.9
野原	2.2	1.6	2.0
畑	7.6	9.4	8.9
たんぼ	22.9	16.5	20.6
学校の校庭	4.9	3.1	4.3
寺・神社	4.5	3.9	4.3
広場	4.9	6.3	5.4
大きな川	9.0	6.3	8.0
小さな川	9.4	10.2	9.7
その他	9.9	12.6	10.9

科別にみると幼児教育科学生では第1位であるが、看護科学生では「小さな公園」が第1位となっており、違いがある。下宿住まいの多い看護科学生の居住環境によるものと思われる。幼児教育科の学生においては小さい頃から遊びなれた「田圃」や「小さな公園」を選んだものと思われる。数名の学生は「健康のための散歩というより余暇時間を利用しての犬の散歩」と記していることから推察できるがこの点については詳細な分析が必要で、今後の課題でもある。

3 長距離歩行の好悪

幼稚園や保育所に勤務し、幼児と共に散歩する機会の多い幼児教育科生の実態と病院内で忙しく活躍するであろう看護科生の実態はどうであろうかの比較であるが、その結果は表3にみるように、全体において

表3 長距離歩行の好悪(%)

長距離を歩くのが	幼児教育	看護	全体
大好き	1.8	5.5	3.1
好き	22.9	25.2	23.7
普通	54.7	52.0	53.7
嫌い	15.7	15.0	15.4
大嫌い	4.9	2.4	4.0

も、専攻別においても「普通」が最も多く半数以上で「好き」「嫌い」の比較においては好きの方が多い数値を示している。専攻別では幼児教育科の学生より看護科の学生が多い数値である。この結果はわれわれの仮説と異なる結果であった。

4 長い距離を歩くことと疲れの関係

この設問は、上記の設問と関係してのものであるが表4にみるように長い距離を歩くことは全体的にみてもまた専攻別にみても苦手のようなのである。「全く疲れない」や「あまり疲れない」と回答した学生は全体で

表 4 長い距離を歩くことと疲れの関係 (%) 9.7%である。これは車

長い距離を歩くことと疲れの関係	幼児教育	看護	全体
非常に疲れる	15.2	21.3	41.7
やや疲れる	54.3	45.7	51.1
普通	22.0	21.3	21.7
あまり疲れない	8.5	10.2	9.1
全く疲れない	0	1.6	0.6

社会になったことの影響も大きい。専攻別で比較してみると、幼児教育科の学生においては「全く疲れない」と回答した学生は皆無であり、全般的にも看護科学生より疲れやすいという傾向にあることがわかる。

5 長い距離を歩いた後の気分

長い距離を歩いたときの情緒的傾向をみるために、問うたものであるが、表5にみるように全体的にもまた専攻別比較

表 5 長い距離を歩いた後の気分との関係 (%) た専攻別比較

気分	幼児教育	看護	全体
非常に不機嫌になる	4.9	4.0	4.6
やや不機嫌になる	18.8	20.8	19.4
いつもと変わらない	39.5	40.8	39.7
あまり不機嫌にならない	29.6	28.0	28.9
いきいきして充実感がある	7.2	6.4	6.9

においてあまり差のない結果である。このように探ってみると、長い距離を歩くと疲れはするものの歩いた後は精神的に充実感を持ち「爽快になる」ということを示しているものと思われる。

6 転倒の有無

歩行中によく転倒することがあるかについての設問であるが、表6にみるように、全体としては「普通」

表 6 歩行中の転倒の有無 (%) も含め転倒を

歩行中に転倒することが	幼児教育	看護	全体
よくある	15.2	9.4	13.1
たまにある	30.0	28.3	29.4
普通	13.9	15.7	14.6
あまりない	34.1	33.9	34.0
全くない	6.7	12.6	8.9

したことがないと回答した者が多いことがわかる。これを幼児教育科の学生と看護科の学生との比較においてみるとやや看護科の学生の方が転倒しないという結果を得た。この結果から推察できることは、看護科の学生は平常からの身体に対する意識が他の学生より高いということも推察できるが、この問題もさらに詳細な資料により分析する必要があるといえよう。今後の課題でもある。

7 転倒するのはどんなときか

学生はどんなときに転倒するのであろうか。その結果は表7の通りで、全体的にも専攻別においても「歩道と車道の境のちょっとした段差のある場所」が最も高い転倒率を示している。このことは、対象が青年後期の短期大学生ということもあり、踵の高い靴をはい

表 7 転倒するのはどんなときか (%) いているためとも

転倒するとき	幼児教育	看護	全体
何でもない	25.9	30.6	27.5
階段の昇りのとき	13.6	10.0	12.4
階段を下りるとき	9.3	15.6	11.5
少しい段差	47.8	35.6	43.6
その他	3.3	8.1	5.0

8 転倒と外傷との関係

転倒をしたときどんなところに傷をつくるのであろうか、表8にみるように「膝」「手の平」「すね」の順である。専攻別では「膝」においては幼児教育科の学生の方が看護科の学生より高い数値を示しており、

表 8 転倒したときの傷 (%) ※複数回答 「手の平」において

傷の場所	幼児教育	看護	全体
手の平	46.2	53.6	48.9
手の甲	0.9	3.2	1.8
肘	8.1	11.8	9.2
肩	0	1.6	0.6
指	0.9	0.8	0.9
膝	70.0	61.5	66.9
すね	14.0	17.4	15.2
太もも	1.8	2.4	2.0
腰	1.4	2.4	1.8

表 9 転倒したときの顔の怪我状況 (%) 「顔」において

怪我の有無	幼児教育	看護	全体
ある	11.7	19.7	14.6
ない	86.6	77.2	83.2
無答	1.8	3.2	2.3

表 10 転倒時に手をついたか (%) の方が多く、幼児教育科の学生の方が看護科の学生より顔面に傷をつけることは少ないという結果を得た。しかし全体的

	幼児教育	看護	全体
手をついた 両手	39.5	47.2	42.3
片手	11.2	11.0	11.1
手をつかない	4.9	11.0	7.1
その他・・・肘	4.5	5.5	4.9
無答	39.9	25.2	34.6

にみた場合、顔の怪我は少ないようである。では顔面の怪我を防ぐために手先についているのであろうかをみるための設問、「転倒時に手お先についたか」によると、表10にみるように約半数が手をついており、顔面転倒の危険は少ないという数値が得られた。

IV 本研究における今後の課題

本報告は幼稚園教諭や保育士を目指す学生と看護科の道を目指す学生を対象に運動環境である散歩と転倒についてみてきたのであるが、今後は詳細な資料のもとに精密な検定を行いその信頼度の検討が必要である。